

富士見の「養狐場」情報求む



富士見町池袋の井戸尻考古館学芸員の平澤愛里さんが、昭和の戦前・戦中期に町内にあったキツネの養殖施設「養狐場」について調査を進めている。不安定な養蚕業の代わりに高級毛皮として欧米へ輸出し、外貨を稼ぐためキツネの繁殖が普及。寒冷地で盛んとなった。富士見に2軒あったとされる施設の情報を探している。(飛矢崎貴規)

南信日日新聞「開業」報じる
養狐業は20世紀初頭、カナダでの成功により移入され、国営事業として樺太や千島で開始。北海道をはじめ本州でも寒冷地の新興産業として広まったが、第二次世界大戦の影響により衰退・消滅したとされている。
歴史研究者で上智大学文学部の北條勝豊教授の問い

戦前・戦中期にあったキツネの養殖施設



井戸尻考古館 平澤さん調査

合わせを受け、平澤さんが戦前の南信日日新聞(現・長野日報)などを調査。当時の新聞紙上では、諏訪市上諏訪の河西荘三が1933(昭和8)年12月、現在の富士見中学校の場所に、広さ1万坪ほどの「河西養狐場」を開業したと報じられている。

富士見高原は理想的養狐地
2匹の銀狐の研究から始め、種狐や毛皮用に販売し

富士見の養狐場についての記事が掲載された新聞を示し、情報提供を呼び掛ける平澤さん

ながら、5年後には37頭まで増加。「富士見高原は理想的養狐地」という見出しの記事もある。諏訪市湖南で開業を目指す人が現れたり視察に訪れたりし、多忙だった様子を伝え、県内に20軒あったとの記述もある。

区誌に数枚の写真と思い出
国の統計「本邦養狐業」の趨勢によると、富士見で

はこのほか小林安衛も営んでいた。同町重里の区誌に数枚の写真と思い出がつけられているが、双方とも詳しい内容は分かっていない。

平澤さんは「富士見に限らず、養狐業についての写真や情報をお待ちしています」と呼び掛けている。調査結果は町公民館報で報告予定。

情報提供は、同考古館の平澤さん(電話0266・64・2044)へ。